

有森信二

渾身の力を込めて足を踏ん張った。私の足は、搭乗したときから強ばったままで。

機は滑走路に出て一旦停止し、先方の機が上がるのを見送った。次は、この機の番である。機内に、まもなく離陸しますとのアナウンスが流れ、客室乗務員もそれぞれの座席のシートベルトを着用している。ざわついていた機内がキンと静まり、緊張した空気に包まれる。機がエンジンの回転を速め、やがてトップの回転に近くなった。

正面の客室乗務員に目を移した。彼女は、唇に微笑みをたたえ、ゆっくりと機内を見渡す。私の表情に視線を止めることなく、乗務員用の椅子に背筋を伸ばしている。

二十六年前、新任の私は課の慰安旅行の幹事を任され、高千穂への一泊旅行を企画した。福岡の職場を貸し切りバスで出発。晩秋の溪谷巡りと秘湯巡りが、殊に好評だった。四月後に定年を迎える主任の橘からは、「厳しく当たってばかりヤツタな。今夜は酔ウトルバイ」と何度も握手を求められた。橘は私の前任者であり、目付役でもあった。担当管内の議員への挨拶、要観察事業所の紹介など、いわ

ゆる箸の上げ方下げ方の全てについて指導を得た。

「お前くらい飲み込みの悪いモンは、初めてタイ」と、ことあることに厳しく叱責されるのだった。

橘は課の殆どの実務に通じ、頑健でもあるのに、どうして昇進しないのかが課内で評判になっていた。声が掛かる度に自ら辞退し、結局私の目付役が最後の仕事になった。

二日目は青島を巡り、昼食も終え、バスは帰路に向かった。そのまま福岡に向かっても日暮れ近くには到着するのだが、空路を利用しようというのが私のアイデアだった。

一泊二日の最後に、雄大な九州山地を下に楽しみ、まだ空が明るいうちに帰福、解散するというプランだった。

「課員三十人、全滅ってことにはナランよね」

「帰りも、バスの方が気楽ジャケンド」

二日間飲み続けの連中の二、三人が割れ声で言った。彼らはバスの中でも、食事中も、切れ間なく飲み続けていた。「空港では、待たず搭乗です。福岡には、四時過ぎには到着します」私がマイクを握ると、まばらな拍手があった。

秋の空は雲一つなく、青く深く澄んでいた。

橘が両手一杯に土産袋を下げ、寄ってきた。

「孫たちのものばかり。いやあ、これもヤライカンバイ」
普段見たこともない、目尻を下げた好々爺の表情を見せる。すぐに搭乗となった。客室乗務員が、いく分緊張気味の笑顔で迎えた。機の乗客の半分以上が、課員で占められた。

「気流が不安定なため、途中大きく揺れることがあります。シートベルトをしつかりとお締めになつてください。航行には差し支えありませんので、どうぞ御安心ください」

離陸直後、いきなり機体が揺れた。安定飛行に入る間もなく、機体は激しく上下する。まるで大時化の船のそれだ。機体は三十メートルほど浮き上がったと思えば、次の瞬間にはスッと五十メートルも落下する。ギャーと、女性の課員たちが悲鳴をあげる。誰かが袋を抱え、吐いている。「久住山頂に航空機墜落。乗客乗員五十人全員即死」

脳裏にそんな号外の見出しが浮かんだ。よく晴れた窓の外に藍色の山肌が迫り、山肌に機影を走らせ、やり過ぎずシートベルト着用サインは点灯したままで、乗務員も自分の座席に着いたものらしい。以後、機長のアナウンスもなく、機体は大揺れのまま空の波に運ばれる。叫んでいた課員たちは、ものも言わなくなった。聞こえるのは、機体の不気味に軋む音と、吐く者の唸り声だけだった。

五十分の予定の筈が一時間をゆうに越え、福岡空港上空では降下待ちが混んでいるということで、何度も巡回した。六時近くになって着陸したとき、機外には救急車が待機していた。二人が救急病院に運ばれた後、ロビーに降り立った課員たちは、肩で息を吐き、胸を撫で下ろしていた。救急車で運ばれた一人である橘が、心臓発作のため病院で死亡したという知らせが、同行した係長から入った。

通夜に出ると、橘はあの好々爺の表情のまま目を閉じていた。枕元には孫たちがいたが、普段から透析治療をしていたらしい奥さんは、シヨックで入院したのだという。

以後何十度という出張は、全て寝台車や新幹線を利用してきた。どうしても、飛行機に乗る気になれないのである。現代は時間との勝負だ。何を考へてるのか。頑固にも程がある。実際、仕事に支障をきたしているというのに。

こんな声に目を瞑り、何とかやり過ごしてきた。しかし、今回は先刻の会議決定を受け、午後四時までには監督庁の担当課に書類を届けねばならない。それには担当の課長である私が出向かないことには、話が始まらない。

二十六年前の橘の、鮮明な寝顔が何度も胸を過ぎった。滑走路をマックスのスピードで走り始めた機が、ふわりと浮いた。民家の屋根が二、三十メートル下になり、自動車販売会社の看板を越え、競技場のグラウンドに機の影を映しながら、斜めに反り上って行く。

私の顔面は蒼白な筈だ。橘が「ナンバ、シヨルトカイ」と片手を上げてくれた気がした。私は急角度の上昇に、胸が破裂せんばかりの思いのまま、身を委ねている。